［成果情報名］ 高冷地における11月～12月収穫の大型花蕾ブロッコリーの有望品種

［要約］ 高冷地における秋冬どりブロッコリーの大型花蕾（500g以上）収穫に適した品種は、11月上中旬収穫では「ブロッケン」、「かいせい113」、「ドリームスカイ」、11月下旬から12月中旬収穫では「クリア」である。

［担当］ 山梨県総合農業技術センター・高冷地野菜花き振興センター八ヶ岳試験地・佐野理香

［分類］ 技術・普及

［課題の要請元］中北農務事務所

［背景・ねらい］

八ヶ岳南麓は稲作地域であり、複合経営品目の１つとして秋どりブロッコリーの栽培が行われている。温暖化に伴い夏秋栽培からの作期が初冬まで延長されつつあるが、11月以降に高冷地で収穫可能な品種についての情報はほとんどない。また、この地域ではスーパーとの契約栽培が中心であるが、通常より大きい花蕾重での出荷が求められている。そこで、高冷地で 11月から12月に出荷ができて、大型花蕾収穫に適した品種の選定を行う。

［成果の内容・特徴］

１．11月～12月に大型花蕾を収穫するには、早生～中生品種を８月下旬に定植（播種：８月上旬）する作型と、晩生品種を８月中旬（播種：7月下旬）に定植する作型が適する（図１）。

２．早生～中生品種の「ブロッケン」、「かいせい113」、「ドリームスカイ（AB181）」を用いると、11月上旬～11月下旬に大型花蕾を安定的に出荷できる（表１、図２）。

３．11月下旬～12月中旬の出荷には、晩生品種の「クリア」が適している（表１、図２）。

４．有望品種において、アントシアニンの発生はなかった。

［成果の活用上の留意点］

１．本試験は総合農業技術センター高冷地野菜・花き振興センター八ヶ岳試験地露地ほ場（北杜市高根町・標高950m・腐植質黒ボク土）において行い、早生～中生９品種、晩生４品種のアントシアニンがない、または出にくい品種を供試して３年間試験を行った。

２．育苗は128穴ペーパーポット、無加温ハウスで行った。生分解黒マルチで２条植え、株間50ｃｍ、条間45ｃｍ、畝幅150cm、肥料は緩効性肥料（N-P_2O_5-K_2O＝12-19-8kｇ/10a）を用いて追肥は不施用とした。花蕾径15cmを目標に蕾が広がる前に収穫した。

３．収穫日は気候により大きく変動する（表１、図３）。年によっては寒さで生育が停止し、収穫に至らない株の発生があるため、定植が遅くならないよう注意する。

［期待される効果］

１．有望品種を用いれば、11月～12月中旬に地域出荷規格での安定出荷が可能となる。

２．高冷地における秋冬の換金品目の１つとして、生産量の拡大が期待される。

[具体的データ]

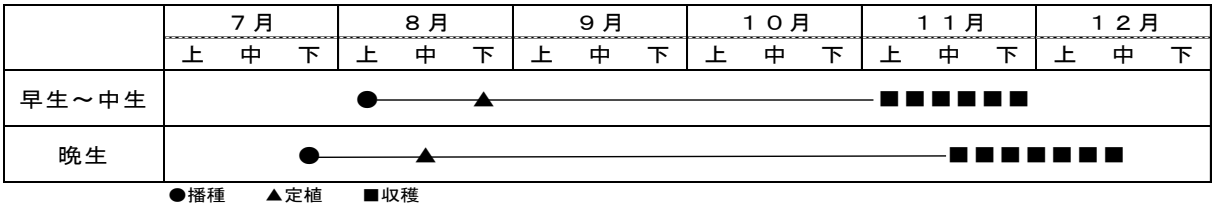

図１　高冷地における11～12月収穫ブロッコリーの作型

表１　11～12月出荷に適したブロッコリー品種の特性（2021～2022 年）

品種名	試験年[z]	可販花蕾収穫期間[y]			可販率（%）	可販花蕾重[x]（g/個）
【早生～中生品種】						
ブロッケン	2021	10/29	～	11/12	98	565
	2022	11/4	～	11/28	98	621
かいせい113	2021	11/5	～	11/24	95	611
	2022	11/2	～	11/30	98	635
ﾄﾞﾘｰﾑｽｶｲ(AB181)	2021	10/29	～	11/19	95	646
	2022	11/4	～	11/30	100	630
おはよう（対照）	2021	10/22	～	11/8	95	489
	2022	11/2	～	11/16	100	563
【晚生品種】						
クリア	2021	12/3	～	12/22	60	612
	2022	11/14	～	12/28	93	694
こんばんは（対照）	2021	11/26	～	12/27	68	595
	2022	11/9	～	12/28	93	548

z:2021年は8月23日定植（8月2日播種）、2022年は早生～中生品種は8月26日定植（8月5日播種）、晚生品種は8月19日定植（7月29日播種）
y:花蕾径15cmを目安に蕾が開き始める前に収穫。
x:葉をすべて落とし、花蕾の花蕾頂部から18ｃｍで調整して測定。

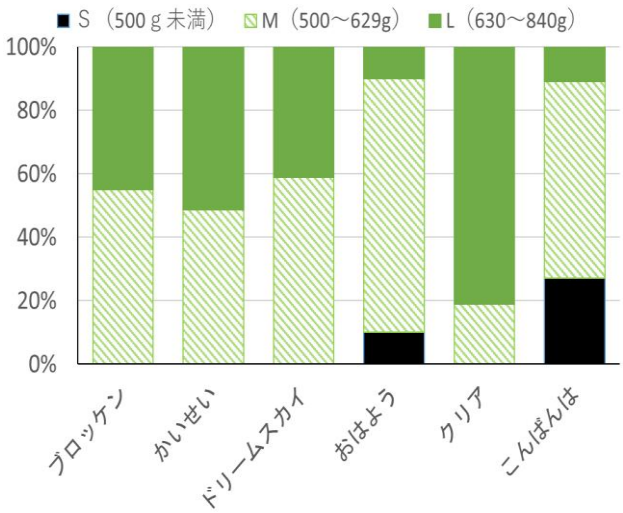

図２　可販花蕾階級別割合（2022 年）

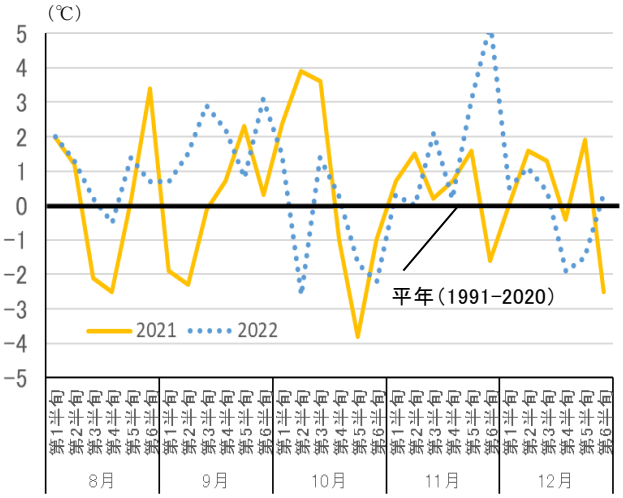

図３　半旬毎の日平均気温（平年差）の推移

[その他]

研究課題名：本県に適した野菜・花きの有望品種選定（H29～）
予算区分　：県単
研究期間　：2020～2022 年度
研究担当者：佐野理香